

長崎市内の都市公園における利用実態と空間的特徴に関する考察

長崎大学工学部 学生会員○中村 太一

長崎大学大学院工学研究科 正会員 石橋 知也

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

新型コロナウイルス感染症による自粛生活の期間、東京都では公園の利用が前年に比べ増加したり、国土交通省はウォークアブルな空間とオープンスペースを組み合わせる施策の必要性を指摘する。また、沿道飲食店等の路上利用の占用許可基準を緩和し、テイクアウトや路上客席営業等、公共空間の新しい使い方も提案されている²⁾。このように、コロナ禍は公共空間の使われ方を再検討する機会を与えると同時に、その質的向上がより一層求められていると言える。

上記背景をふまえ、本研究では公共空間の質的向上を検討する基礎的知見を得ることを目指し、公共空間の代表である都市公園に着目し、その利用実態調査に基づき考察することを目的とする。

1.2 研究の進め方

本研究は以下の手順で進める。1)「長崎市まちぶらプロジェクト」³⁾を参考に市街地の都市公園を3か所選定する。2)予備調査より、選定した公園を計測し図化したうえで、利用実態の調査方法を検討する。3)本調査では、3か所の公園それぞれの平日と休日の1日(7~18時)の利用を把握する。2時間ごとの利用行動を軌跡と行動内容のメモとして図面に記録する。4)公園の利用行動の記録を集約・図化し、利用行動の種類を抽出し計数する。5)公園の空間と利用実態の関係について考察する。

2. 公園の選定と予備調査

前述した長崎市まちぶらプロジェクトでは「まちなか軸」が指定されており、この付近に位置する中央公園、出島表門橋公園、湊公園を調査対象とした(図1)。予備調査は2020年10月に3公園でおこなった。

3. 本調査結果と考察

3.1 調査内容と結果

本調査は2020年11月に3公園で、平日と休日それぞれ1日でおこなった。調査結果(平日)を図2、3、4に示す。図に示すように、公園の利用者が公園

内をどのように通行したかは図中の赤線によって示し、その線の多寡によって歩行者量が把握できる。一方、公園内での利用行動は、その発生場所に2時間ごとに区別した記号で示し、その具体的な行動内容は引き出し線で記載している。



図1 3公園の位置図および調査風景

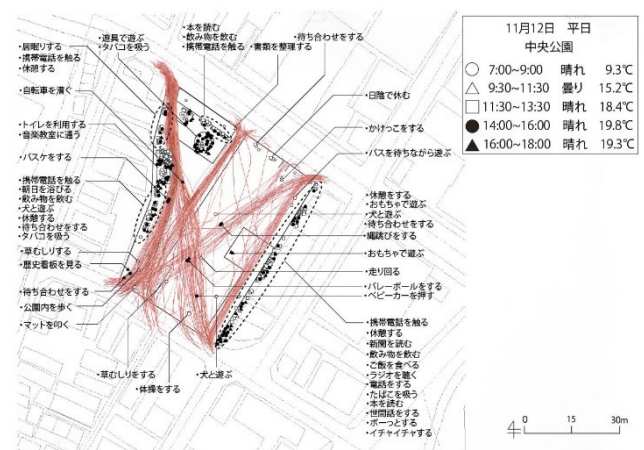


図2 調査結果：中央公園(平日)

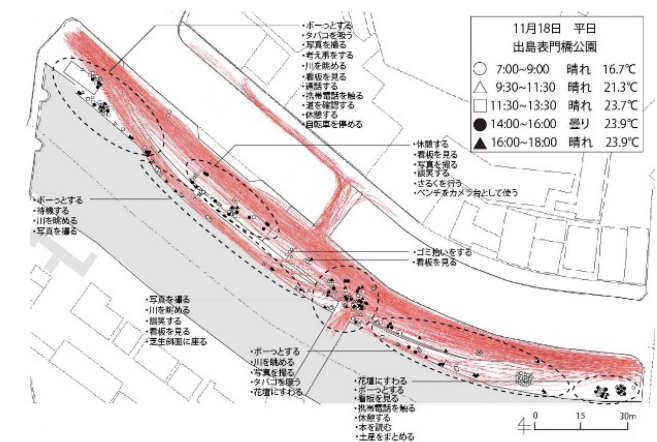


図3 調査結果：出島表門橋公園(平日)

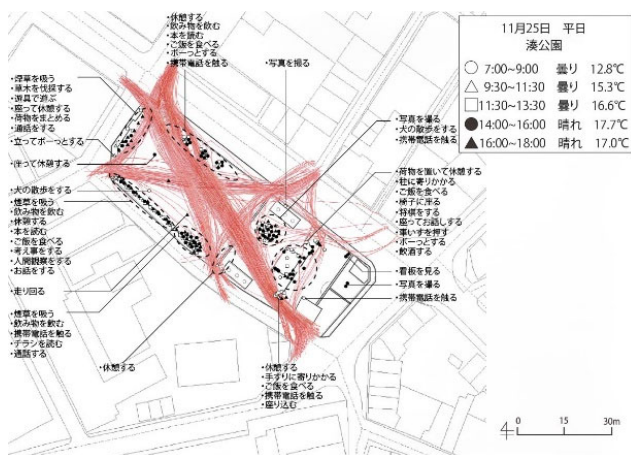


図4 調査結果：湊公園（平日）

3.2 利用実態調査に基づく考察

公園での利用行動を比較するために表 1 を示す。まず、公園内での行動をその場にとどまる行動（以下、静的行動と呼ぶ）、公園内で体を動かす行動（以下、動的行動と呼ぶ）、公園内を通行する行動（以下、通過行動と呼ぶ）に分けて考察する。

中央公園では、静的行動が 30%、動的行動が 70% となり、休憩よりも運動を目的として人々が利用していることが分かった。一方で、出島表門橋公園、湊公園では、それぞれにおいて静的行動が 62%, 93%, 動的行動が 38%, 7% となり、運動よりも休憩を目的としていることが分かった。これは中央公園の敷地が土のグラウンドであることや、敷地内の通過行動の赤線が他の公園よりも少ないことから、運動しやすい環境が比較的整っていると推察する。また、湊公園の静的行動が高い割合を占めた点については、この場所に喫煙所が設けられていることや、他の公園に比べ、腰掛が多く設置されていること等が関連していると推察する。一方で動的行動の割合が低かった点については、敷地内が南北に長く、向かい合う緑

表1 公園での利用行動の比較（平日）

	中央公園			出島表門橋公園			湊公園		
静的行動	30%	a	62%	62%	a	67%	93%	a	44%
		b	27%		b	4%		b	30%
		c	11%		c	30%		c	26%
動的行動	70%	d	79%	38%	d	4%	7%	d	49%
		e	4%		e	6%		e	30%
		f	17%		f	90%		f	21%

静的行動のうち、a は休憩・会話、b は飲食・喫煙、c はその他を示す。動的行動のうち、d は遊び、e は運動、f はその他を示す。

側の腰掛の距離が近く、人が座ると視線が中心部に集まるため、敷地内で活動しづらく動的行動が少なかったと推察する。

次に、静的行動を a 休憩・会話, b 飲食・喫煙, c その他（待ち合わせ, 写真撮影等）, 動的行動を d 遊び, e 運動, f その他（バスの乗降, ゴミ拾い等）に分けて考察する。

静的行動については3つの公園に共通して、aの割合が最も高かった。一方でbは出島表門橋公園で顕著に割合が低かった。それは他の公園に比べ最も腰掛の数が少ないことや、喫煙所がないこと、通過行動も多いことから、飲食・喫煙の場所に適していないことが要因として考えられる。またcにおいて出島の写真撮影が多かったことから、bの割合が低くなったことを助長させたものと推察する。

動的行動については各公園で行動の割合が分かれた。中央公園では d の割合が高かった。これは他の公園に比べて、複合遊具や、ボール遊びを可能にする柵等があり、公園内で様々な遊びができるためである。出島表門橋公園では f の割合が高く、その内訳として修学旅行生によるバスの乗降が顕著であったことが把握されている。湊公園では、限られた空間での子どもによる縄跳びや自転車等を持参した遊びが展開され、 d の割合が最も高くなったものと推察する。

4. 今後の展開

今後は、各公園でどこからどこへ向かうか分析するために通過行動の軌跡の本数を集計する。静的、動的、通過の行動の3つを合わせ、さらに考察する。

参考文献

1)国土交通省都市局：新型コロナを契機としたまちづくり，オープンスペースの今後のあり方と新しい政策の方向性，<https://www.mlit.go.jp/toshi/machi/covid-19.html>

2)国土交通省道路局：新型コロナウイルス感染症の影響に対応するための沿道飲食店等の路上利用に伴う道路占用の取扱いについて、https://www.mlit.go.jp/report/press/road01_hh_001324.html

3)長崎市まちづくり部：まちぶらプロジェクト，<http://www.city.nagasaki.lg.jp/sumai/660000/666000/p024188.html>

(上記全て 2021 年 1 月 6 日に確認した)